



日本におけるクビアカクビホソハムシの新発生報告

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構 農業研究本部 中央農業試験場 **さ さ き たい よう**
佐々木 太 陽

はじめに

クビアカクビホソハムシ (*Oulema melanopus* (Linnaeus)) はヨーロッパ、北アフリカ、中東、アメリカ、シベリア、モンゴルなどに広く分布しており、主にムギ類穀類、牧草の重要な害虫である(横浜植物防疫所, 1998)。本種は、検疫有害動物として指定されている。国内ではこれまで確認されていなかったが、2023年6月上旬に北海道内の二条大麦および秋まき小麦で初めて国内での発生が確認された(北海道病害虫防除所, 2024)。本報告では、本種の発見確認の経緯、形態的な特徴、海外での被害や主な寄主植物および当面使用可能な薬剤などについて紹介する。

I 発生確認の経緯

本種が初めて確認された経緯は、以下の通りである。2023年の6月上旬に北海道内において二条大麦の葉に

止葉を中心に害虫による食害が確認され、食害部分が退色する症状が圃場全面に発生しているとの相談を受けた。当該圃場を調査したところ、葉の表面にかすり状の白い食害痕が多数あることを確認した(図-1)。これに加えて、同様の症状を隣接圃場の秋まき小麦においても確認した。これらの被害作物の葉上には、虫糞を背負っている幼虫が多く確認された(図-2)。それぞれの作物の寄生幼虫数と食害状況を調査したところ、上位3葉における幼虫数および被害葉率は、二条大麦ではそれぞれ2.8頭/株、100%、秋まき小麦では0.6頭/株、45%であった。幼虫の外部形態と食害状況から、加害種は当初、北海道内に分布する在来のムギクビボソハムシ (*Oulema erichsonii* (Suffrian)) の可能性が高いとした。しかし、ムギクビボソハムシは従来から発生頻度や被害程度ともに軽微で、上述のような高い寄生密度や被害葉率が認められることがなかったことから、種の同定のため秋まき小麦の葉を餌として室内で飼育をした。その結果、7月



図-1 二条大麦(左)および秋まき小麦(右)におけるクビアカクビホソハムシ幼虫による葉の被害(2023年6月中旬)

A New Occurrence of *Oulema melanopus* (Linnaeus) (Coleoptera, Chrysomelidae, Criocerinae) in Japan. By Taiyo SASAKI

(キーワード: 北海道, ムギクビボソハムシ, イネクビボソハムシ, クビボソハムシ亜科, ムギ類)